



みずみどり

2020年 10月1日 第140号

発行：いたばし水と緑の会事務局

年会費 2,000 円 郵便振替 00170-8-352508 いたばし水と緑の会
<http://mizumidori2.eco.coocan.jp>E-mail : mizumidori@nifty.com

〒174-0063 板橋区前野町 5-31-7 瀬田方 tel&fax3969-7124

ツチイナゴとバッタ

話題になったサバクトビバッタ

ツチイナゴはバッタ広場でよく見かけます。大きいので最初はトノサマバッタかと思いました。5cm位あり、トノサマバッタに似ています。似ているのに、一方は「殿様バッタ」という名前で、一方が「土イナゴ」。どちらもバッタの仲間ですが、名前からくるイメージがえらく違いますね。

姿のどこが違うかという、ツチイナゴには目の下に涙のようなもようがあることです。飛ぶ力も違います。トノサマバッタは遠くまで飛ぶことができます。



左
成虫 褐色



右
幼虫 黄緑色

色無しの写真、わかりにくくてすみません。

ホームページでは会報をカラーで紹介しています。また上記メールアドレスのご連絡いただければ、メールでカラーの会報をお送りします。

ツチイナゴは、藪のような環境を好み、成虫で越冬します。春になると卵を産んで死んでしまうと思っていましたが、5月の連休にまだ元気で生きていました。他のバッタ類が夏には成虫になるのに、9月の中頃にツチイナゴの幼虫がまだいたりして、登場する季節が少しずれています。幼虫はきれいな黄緑色、成虫になるとがらっと変わって褐色になります。ツチイナゴはバッタ広場に多いですが、道ばたにもいるし、秋から冬にも出会える虫です。

バッタ広場には、ショウリヨウバッタとオンブバッタもいます。ショウリヨウバッタは飛ぶときキチキチとなくので、子どもの頃私はキチキチバッタと呼んでいました。コメツキバッタと言う人もいます。これはバッタの両足をつかむとからだを上下に大きく動かす姿が米を搗いているようにみえることからきた名前です。

コメツキバッタという名前は、田んぼや畑があって、イナゴもバッタも身近な存在だった名残でしょうね。今、米を搗く格好に似ていると言われてもピンとこない。コメツキバッタは上司にペコペコする人も指しますが、この言葉もあまり使われなくなったように思います。

オンブバッタは、公園や庭にも多く、シソの葉がかじられたりしますね。オンブバッタは飛びません。上に乗っているのはオス、オンブしている大きい方がメスです。



ショウリヨウバッタ（上）は、ススキのようなイネ科の植物を食べ、頭が尖っていて、足を広げて止まります。逃げ足が速く、なかなか写真が撮れません。



オンブバッタは、ずんぐりしていて足をからだにくっつけて止まります。

トノサマバッタのこと

さてトノサマバッタですが、私は見たことがありません。なので写真を紹介できません。トノサマバッタは、飛んでいる時間も飛行距離も長いそうです。バッタ広場がトノサマバッタの生息に適した環境なのかはよくわかりませんが、荒川などにはいるのかもしれませんが。

サバクトビバッタはトノサマバッタの仲間

東アフリカで大発生したサバクトビバッタの被害は報じられ、またインドや中国でも発生してい

アフリカ東部 食糧危機の恐れ

バッタ襲来 食い尽くす

【ナイロビ＝共同】アフリカ東部にバッタの大群が襲来している。大雨などの気候変動が大発生の原因とみられ、ケニアでは過去七十年で最悪の規模に。隣国ソマリア政府は二日、非常事態を宣言した。バッタは



「食糧事情が悪化しかねず、危機的だ」。国連食糧農業機関（FAO）幹部が訴えた。FAOによると、一平方キロ内のバッタの群れには約四千万匹がおり、一日で約三万五千人分の作物を食べ尽くす。ケニアで昨年末に飛来が確認され、二千四百平方キロの広範囲に及ぶ大群もいたという。

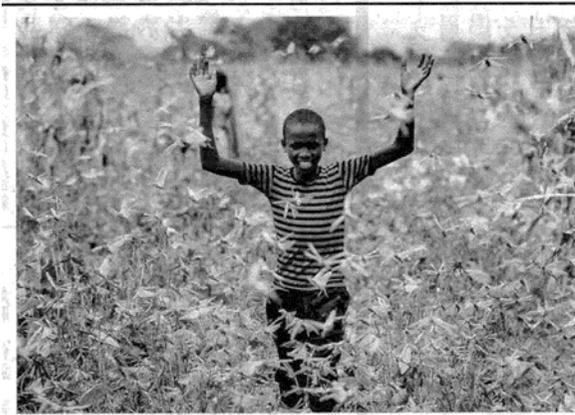
畑の作物を食い荒らし、一帯が深刻な食糧危機に陥る恐れが高まっている。

視界を遮るほどの群れが押し寄せ、なすすべがなく立ち尽くす住民たち。ケニアのテレビ局が四日までに、バッタが襲来した村の様子を報じた。

「食糧事情が悪化しかねず、危機的だ」。国連食糧農業機関（FAO）幹部が訴えた。FAOによると、一平方キロ内のバッタの群れには約四千万匹がおり、一日で約三万五千人分の作物を食べ尽くす。ケニアで昨年末に飛来が確認され、二千四百平方キロの広範囲に及ぶ大群もいたという。

アフリカ東部は近年、大雨だけでなく干ばつにも見舞われ、作物が十分に育っていないかった。バッタの大発生前から約九百万人が食糧不足に直面しており、一層の悪化が懸念されている。

ケニア政府は小型機を使って殺虫剤を散布するが、バッタは一日に約百五十キロ移動し、飛来場所を予測するのは困難だ。ソマリアではイスラム過激派が実効支配する地域があり、同国政府は十分に対策を取れていない。



1月24日、ケニアで農作物からバッタを追いかおうとする農場関係者＝AP・共同

東京新聞 2月5日

るようです。サバクトビバッタはトノサマバッタの仲間です。

トノサマバッタはやや乾燥した土地にすみ、普通は1匹でいますが（孤独相）、高温、高降水量によりエサとなる草が増えると、大量発生し、相変異を起して、羽が長くなり、集団で行動するようになり（群生相という）、イネ科の植物だけでなく、トウモロコシや野菜まで食べ尽くし、1カ所で食い尽くすと、集団で別の場所に移動し（飛ぶ力はさらに強くなり）、「蝗害」をもたらします。アフリカのサバクトビバッタは高温と大雨の影響だそうですが、干ばつにより川が干上がって川底に草草が出現するとやはりバッタが大量発生することがあるそうです。

イナゴは漢字で「蝗」と書くので、蝗害は蝗（いなご）の大群による害と書かれています。実態はトノサマバッタ等のトビバッタの大群による災害を言います。バッタの被害は旧約聖書にも書かれていて、中国でも古くからトノサマバッタによる蝗害が繰り返し発生しています。

東アフリカではサバクトビバッタの被害で食糧危機に陥るおそれが高まっているそうです。新聞には「気候変動が原因」と書かれていました。日本でも気候変動の影響とも言われる大雨による被害が頻発しています。

気候変動によって蝗害の頻度が高まり、温室効果ガスの排出量が世界で一番少ないアフリカの人々が、気候変動の影響を受けるのは不公平で、納得できません。先進国の私たちの責任は大きいです。

「成増1丁目向新田の森」再訪の印象

私の標本箱に2005年12月5日採集と記された“クロスジフユエダシャク”という初冬に見られるガの標本がある。採集地は成増1丁目36番地の雑木林である。この場所が開発されることに決まった年で、多分これが最後のクロスジフユエダシャクになるだろうと思いつつ採集した記憶がある。



クロスジフユシャク



キマダラセセリ

今年の5月末、久しぶりに「成増1丁目向新田の森」の中に入った。新田の森はクロスジフユエダシャクの採集地とは細い通路を挟んだ隣の森である。見ることが出来た昆虫はキマダラセセリのみであった。林縁部等のやや明るい環境に多いチョウである。短い時間だったので昆虫相の違いなどは当然判らないが、多分かなり変わっているのではと推測される。



当時から新田の森は隣の森に比べシラカシやシノキが多い森であった。現在シラカシの実生は一層増え樹高もかなり高くなっている。コナラやクヌギは縁に残っているが勢いはあまり無いようだ。明るく広い林縁部を好むクロスジフユエダシャクはもう居ないような気がする。クヌギを好むクロバネフユシャクも絶滅したかもしれない。

隣地から移植した植物も消えてしまったものがあるよう

向新田の森の隣にあった雑木林（成増1-36 2005年7月撮影）

だ。シラヤマギク、ツリガネニンジン、シュンランなどが今回見つからなかった。精査していないので不明だが消えてしまったような気がする。低木のオオバイボタやゴンズイは健在なようだが、もう少し時間をかけて調べる必要があると思う。

白子川沿いの環境の変化も一層進むであろう。私が知っているのは練馬区大泉と土支田の境界から下流のみであるが、畑地がどんどん宅地になっている。樹林地は案外残されているが、林床は踏み固められている所が多く、良好な樹林地は少ないと思う。最も気になるのが新田の森対岸の和光市白子である。料亭百涯荘も20年前にマンションになり、周辺もマンションが増えてきている。

メスの翅が退化したフユシヤク類やオスもメスも翅が退化しているオサムシ類などを除けば、飛ぶことが出来る昆虫は一端絶滅しても別の場所から移動してきて住みつくかも知れない。ただしこの別の場所が遠くなるにつれ移動してくる生物は少なくなる。移動先の地の面積が狭くなるほど移動者が定着できる確率は低くなる。「新田の森」のめかなり厳しい状況になっているような気がする。(釣巻岳人)

生き物達のビオトープ (1)

バッタ広場の意味と役割

いたばし水と緑の会は、生き物がかわりあって暮していける場所として「ビオトープ」をつくって維持しています。城址の「バッタ広場」とため池公園の「赤塚トンボ池」です。都会の中の区民が集う公園の中にある生き物の場所「ビオトープ」はみんなが応援してくれているわけではありません。昆虫採集の場所として利用する人も多いですが、汚い藪だと言う人、防犯上問題だと言う人もいます。

お目当ての虫や花を探したりしないで、ただ立ち止まって「自然はいいねえ」と風景としてながめて行く人もいます。ありがたいお客さんです。私も同感です。

ビオトープは放つたらかしの自然ではなく、それなりに手入れをしています。1997年に会を設立してから20年以上もたつと、会員も高齢化し、維持管理作業が厳しくなってきましたが、超高齢化社会の世の間、できる範囲でできることを続けていきたいと思っています。

バッタ広場が生物多様性保全区域になった

東京都は赤塚公園における生物多様性保全事業の取り組みのなかで、バッタ広場とその外側の草地在が保全区域に位置づけられました。維持管理は水と緑の会だけでなく行政（赤塚公園サービスセンター）も行うとされています。

自然保護団体からも評判の悪かった草ボウボウのバッタ広場は自然地として堂々と生き残ることができるようになりました。よかったです。

生物多様性の保全とは、きれいな花が咲く野草の保全だけではありません。生物多様性とは、多様な生態系のこと、細菌、土壌生物、遺伝子を含めて、いろいろな生物が関わり合って生きること（以前は自然と言っていた）。生物多様性（＝自然）は、人類を含めた多くの生命にとつ

て欠かすことの出来ない命の土台であるからこそ地球規模で保全する大切さが認識されるようになったのです。都会の公園では、自然は私たちに安らぎをもたらしてくれます。

私たちは生き物達が関わり合って生きている自然の草地を「バッタ広場」と名付けました。貴重種やきれいな生き物もいますが、そうでない生き物も含めて、生き物達を私たちの「お隣さん」として認めて付き合いたいという思いで維持してきました。チョウチョはかわいいけどイモムシは嫌い、虫は全部嫌い、と言う人が多いですが、虫好きでなくても趣旨を理解してくれる人、理屈抜きで自然はいいねと言う人、「昔はこんなところが多かったね」となつかしむ人もいます。私たちは「〇〇チョウがいたよ」とか「〇〇の花が咲いた」と個別の種についてこだわりますが、全部ひっくるめた風景も大切と思います。

小学校の生き物探検授業に関わったことから、生き物のためだけでなく、子ども達の授業に使えるバッタ広場にする必要がでてきました。藪や木を減らし、クズ・ササを刈る作業は、植物の生育の旺盛な暑い季節になり、汗だくになります。そうしたらキンミズヒキが咲き誇り、見どころが出来たというか、喜んで見る人が増えました。黄色のキンミズヒキの群落は、都会にいることを忘れてしまう美しさです。



キンミズヒキ



ガガイモの花と実

キンミズヒキは2009年にはじめてここに生えてきました。2015年には2本になりました。きれいな花が多数付いたので、種を採取してばらまいたらどんどん増えてしまいました。植物をえこひいきするとこうなるのですね（少々後ろめたさを感じます）。



木村さんが今観察しているガガイモ、ヒメジソ（?）、アキノノゲシ、ハエドクソウ、チカラシバ、それにエノキやコナラなどは、バッタ広場が出来て（草刈を止めて）、3年ほどからひとりでに芽ばえたものです。こういう力が自然にはあるのですね。一方ヒナノウスツボやチガヤは環境が変わって消えてしまいました。

ただの雑草だったチカラシバもめずらしい?

変化する自然のおもしろさと悩み

芝生のような草丈の低い草地はあっても、草丈の高い草地が減少しています。草を家畜の餌や燃料、屋根（茅葺き）に利用しなくなり、また遊んでいる空地に家が建ったりしたためです。草丈の高い草むらにすむショウリョウバッタやカマキリ、キリギリス達のためのバッタ広場は小さくても役立っていると思います。

日当たりのよい草地は、放っておくとすぐに藪から森に遷移します。活動日に雨が重なると、バッタ広場は人を寄せ付けないジャングルになり、草ボウボウだと人は入らないので生き物天国になります。まちなかの公園なので非難や苦情がくると困る。ササやクズを刈ると、人の利用が増え、虫も減り、地面が固くなり・・・生き物と人間のバランスをとるのは結構むずかしい。

人間関係だけでなく、植物の世界も強いものが勝ち、単調になっていくように思います。南北のライン上の植物調査を続けてきましたが、木は大きくなるしササは範囲を広げる。バッタ広場のなかに広く茂っていたチカラシバは急速に減ってしまいました。なぜかわかりません。

赤塚公園の崖下は土盛りされ造成された草地ですが、城址は自然のままの土、周囲の樹林地に生き物が行き来できるし、動植物にとって貴重な環境です。不思議に満ちて興味は尽きませんが、自然を管理することの、おこがましさ、無力さを感じたりもします。

観察記録（8月、9月）

トンボ池・城址下

オオシオカラトンボ産卵、ヤブヤンマ産卵、アオダイショウ（物置）、ヒバカリ、ザリガニ、スジエビ、トノサマガエル、シオカラトンボ♂、オオシオカラトンボ♂、ウラギンシジミ、オンブバッタ、クビキリギリス、

幼虫（ヒメジャノメ？）、ミツバチ、キタテハ、コガタコガネグモ、イオウイロハシリグモ、ジョロウグモ、ホシホウジャク、オオスカシバ、ノササゲ花、

バッタ広場。

セスジツユムシ、ツチイナゴ、クビキリギリス、ショウリョウバッタ、オンブバッタ、オオカマキリ、ハラビロカマキリ、コカマキリ、シオカラトンボ♀、赤とんぼ（多）、

オオウンモンクチバ、アカボシゴマダラ、アゲハ、モンシロチョウ、ヤマトシジミ、ツバメシジミ、サトキマダラヒカゲ、イチモンジセセリ、ムラサキシジミ、ゴミグモ、ジョロウグモ、ナガコガネグモ、ササグモ、オオスズメバチ、カナヘビ
ガガイモ（花と実）、ヒメジソ、チカラシバ、キンミズヒキみんなきれい。

自然地なのでスズメバチもときどき来ます。手を出さないで知らんぷりしてください。



活動のお知らせ

活動の問い合わせ等は事務局 瀬田（3969-7124）または
坂本 090-4618-1295

1 赤塚ビオトープ（赤塚トンボ池、バッタ広場）の手入れ

10月24日（土）10：00～11：30 水路手入れ（草刈り）

11月28日（土）10：00～11：30 トンボ池・水路（草刈り）

集合場所：赤塚トンボ池前

雨天の場合は中止（または翌日） 問い合わせは：事務局まで
汚れてもよい靴と服装で。軍手（作業手袋）、蚊も出てきました。

2 赤塚城址自然観察会（第2日曜日）

どなたでも参加できます。子どもさんも一緒にどうぞ。生きものは観察したら自然に返してね。30分程度ササ刈り等もやります（カマは用意します）。

小雨でも実施。連絡先：事務局まで

10月11日（日）10：00～11：30

11月8日（日）10：00～11：30

集合場所：板橋美術館そばの赤塚トンボ池前

参加費：無料（保険には加入していません）

もってくるもの：長袖の服、あれば双眼鏡、虫眼鏡、図鑑、虫よけ

3 日暮台公園と樹林地の観察

10月4日（日）10：00～11：30

11月1日（日）10：00～11：30

日暮台公園前集合

連絡先：事務局または坂本（090-4618-1295）

●ビオトープボランティア大歓迎

いたばし水と緑の会は、自然と共存するまちづくりをテーマに、ビオトープ（赤塚トンボ池と赤塚公園バッタ広場）などの観察と手入れ作業、日暮台公園自然樹林地の定点調査などを行っています。定点の観察と手入れを通して、季節の変化や新しい発見があって楽しいですよ。

●会員になってくださると板橋の自然情報を中心とした会報「みずみどり」（隔月発行）お送りします（年会費2000円：振込先は表紙に記載）。

●身近な自然情報やご意見などをお寄せ下さい。